鎌倉殿の十三人

第三回

講談師　一龍斎貞花

将軍源頼朝に続いて二代頼家も亡くなり、有力御家人の間に権力闘争が激しくなった。

源平の戦いに功を立て文武両道に秀でた清廉なる豪傑畠山重忠と、初代執権北条時政が対立。

「重忠め、武蔵の国の領土についてとやかく申しておる。重忠を滅ぼすいい機会だ。義時、重忠が謀反を画策し多くの兵を動員しておる。幕府の一大事、ただちに追討に行け」

義時は、父の命令に軍勢を率いて重忠の屋敷を急襲。ところがわずかな人数で戦いの備えなくあえない最期。享年四十三歳。畠山重忠の乱といわれるが義時は、重忠勢の少なさから謀反の心は無かったと無実を悟り、重忠の首を見て涙を流し、義時が父時政を乗り越えるきっかけとなり、時政が後妻の子を将軍に据えようとしたことから、姉政子と手を組んで父を追放。

義時が二代執権となるや、三代将軍実朝が爺（じい）と慕った初代侍所別当和田義盛も、和田一族が強力になることを恐れた義時が、義盛を挑発し戦いを仕掛け義盛を滅ぼし、実朝が信頼できる家人がいなくなってしまった。

〝大海の磯もとどろに寄する波
われて砕けてさけて散るかも〟
（金塊和歌集）

和田一族決起の噂に、鎌倉中騒然としていた時に実朝が詠んだ歌。ただ傍観している自分の姿を詠んだものの、勇壮な万葉調と解釈され、立ち向えば兄や宿老のように殺されてしまうと。和田合戦のあと北条の専横がつのります。

実朝はひそかに逃げる決心し、巨大な唐船を造らせ宋へ渡ることを計画、

「将軍はおかしい、狂ったぞ」

政治に口出しするわけでも、戦いを挑むわけでもないが幕府内は騒然となった。しかし鎌倉由比が浜に巨大な唐船が浮かぶことなく、宋へ渡らんとした実朝の夢はついえた。

二年後の承久元年正月、鶴ヶ岡八幡宮で拝賀の祝にのぞんだ実朝は、兄頼家の子公暁に、

「父の仇、思い知れ」と暗殺されてしまった。実朝享年二十八歳。

参拝に同行するはずであった義時が急遽同行しなかったので、義時がそそのかして暗殺させたのではないかといわれ、三浦義村によって公暁もただちに殺され、実朝の首は鎌倉から三十キロ離れた波多野（神奈川県秦野市）へ三浦の家臣によって運ばれ、実朝の首塚があるところから、そそのかしたのは三浦義村ではないかとの説も。かくして頼朝直系の子孫は断絶、北条が源氏から名実ともに実権掌握の狙いからだったかもしれません。

実朝が亡くなるや、百人もの御家人が悲しみの余り出家したいといいますから、いかに慕われていたかが判ります。

政子、立つ

和歌を愛する後鳥羽上皇は、金槐和歌集を編纂するなど和歌に優れ、目をかけていた実朝が殺されるや、

「実朝の死によって将軍職が空白となり、鎌倉幕府は弱体しているに違いない、ここぞ」と、実朝の死から二カ月後の

承久元年三月、

「上皇の愛人の土地、摂津国長江の倉橋荘（豊中市）を管理している武士を解任して朝廷の管理に」と要求。

土地の権利は関東の武士たちが、自分たちで耕した土地の所有権を、頼朝が認めてくれたので頼朝に従った。

土地の権利を放棄せよという朝廷の要求を政子は拒絶。

これが承久の乱の一因となり、朝廷と幕府の対立は深まり、二年後の承久三年、上皇は僧侶を集め、

「幕府を、呪い滅ぼすための調伏を行え」と指示。

政子の耳に入らぬはずがありません。承久三年五月十四日、後鳥羽上皇は遂に挙兵。まず幕府の京都守護職を攻め滅ぼし幕府追討の宣旨。上皇の命令が全国に発令され承久の乱勃発。

五月十九日正午、上皇の使者から宣戦布告がもたらされた。

報せを聞いた武士たちは、ただちに政子の屋敷に集ってきた。

「降参すれば我々の領地を、取り上げられる恐れがあるぞ」

「だが、これまで朝廷に弓を引いた者はいない。朝廷に刃向かうことは天子様への反逆ということになる」

動揺する武士たちの様子に、政子の胸にさまざまな思いが蘇ってきた。

夫頼朝と共に幕府を開き、武士の利益を守るために奔走してきたではないか、ご家人の勢力争いから二人の息子を失ってしまったが、ようやく勝ち得た武士の権利を失っていいのか。

不安げな家来たちの顔を見るや、六十五歳の政子は敢然と立ち上がった。

「皆、心を一つにしてよく聴きなさい、これは私の最後の言葉です。

頼朝公が朝敵を征伐し、関東に幕府を創立して以来皆の官位は高く、領土も広がり収入も大きくなった。その御恩は山よりも高く海より深いものです。ところが上皇は今、逆臣の言葉に惑わされたか追討の宣旨を下された。

名を惜しむ者は即座に出陣して、朝廷に味方する侍や、裏切り者を討ち取り三代の将軍が築いてきたものを守り抜くのです」

政子が語り終えるや、武士たちはいずれも涙を流し、

「命を捨てて恩に報いようではないか」

「そうだ、今こそ立ち上る時だ。皆、心を一つにして戦おう」

かくして幕府最大ともいえる危機が政子の言葉、檄によってご家人たちの心は一つになったのでありました。

「先手を打って出撃したらどうだ」

「いや待ち構えて攻めてきた敵を討つべきだ」

攻めて来た敵に対する方が、朝廷に真っ向から弓を引かなくて済むという気持ちもあったのであろう、出撃論より迎撃論が多数を占めた。

すると、以前朝廷に仕え、朝廷の弱点を知る幕府Ｎｏ．３の立場にある大江広元が、「速やかに上洛し、朝廷と戦うべきです」と主張。

幕府の基礎を固め、頼朝亡きあとも政子を助けて北条と共に政務を司り将軍の擁立、反乱を鎮め執権義時を盛り立て、義時が死去するや直ちに泰時を執権職にするなど執権政治を確立。政子が信頼し政子の師ともいえる広元の出撃論によってただちに泰時を総大将として攻め上ることを決定。

泰時は、父義時死後執権となり、幕府の基本となる「御成敗式目」を制定したり鎌倉の市街地整備を行うなど、父義時に勝る名執権といわれた人。

総大将泰時のもと総軍合して十九万余騎の大軍。

幕府が正面から朝廷に反逆することは歴史上初、後鳥羽上皇は愕然とした。朝廷軍の全兵力三千余騎とあって次々と敗走。王城鎮護の使命をおびている延暦寺は、戦いの情勢を見て協力の命令を無視。

朝廷は完敗、王城京都は東国の荒夷（えびす）どもに踏みにじられ、上皇は「今回の倒幕挙兵は総て臣下のしでかしたことで自分の意志ではなかった」最高責任者が臣下の責任として己れの保身。

幕府は勝利を収めるや、容赦なく後鳥羽上皇を隠岐に、順徳上皇は佐渡に、土御門上皇は土佐に流罪という荒療治。後鳥羽上皇の系統である仲恭天皇を退位させ後堀川天皇を任命、天皇の任命権まで手に入れ広大な後鳥羽領を没収。戦後処理はほとんど政子が行ったといわれ、頼朝以来できなかった政（まつりごと）は総て幕府の意志通りに行うことが出来、北条一族が実権を握る北条執権幕府となり日本を統轄する武士政権を確立。以後武士の世は徳川幕府崩壊まで六四六年の長きにわたって続いたのです。

尼将軍政子敢然と立ち上がり鎌倉幕府の危機を救った承久の乱の一席。